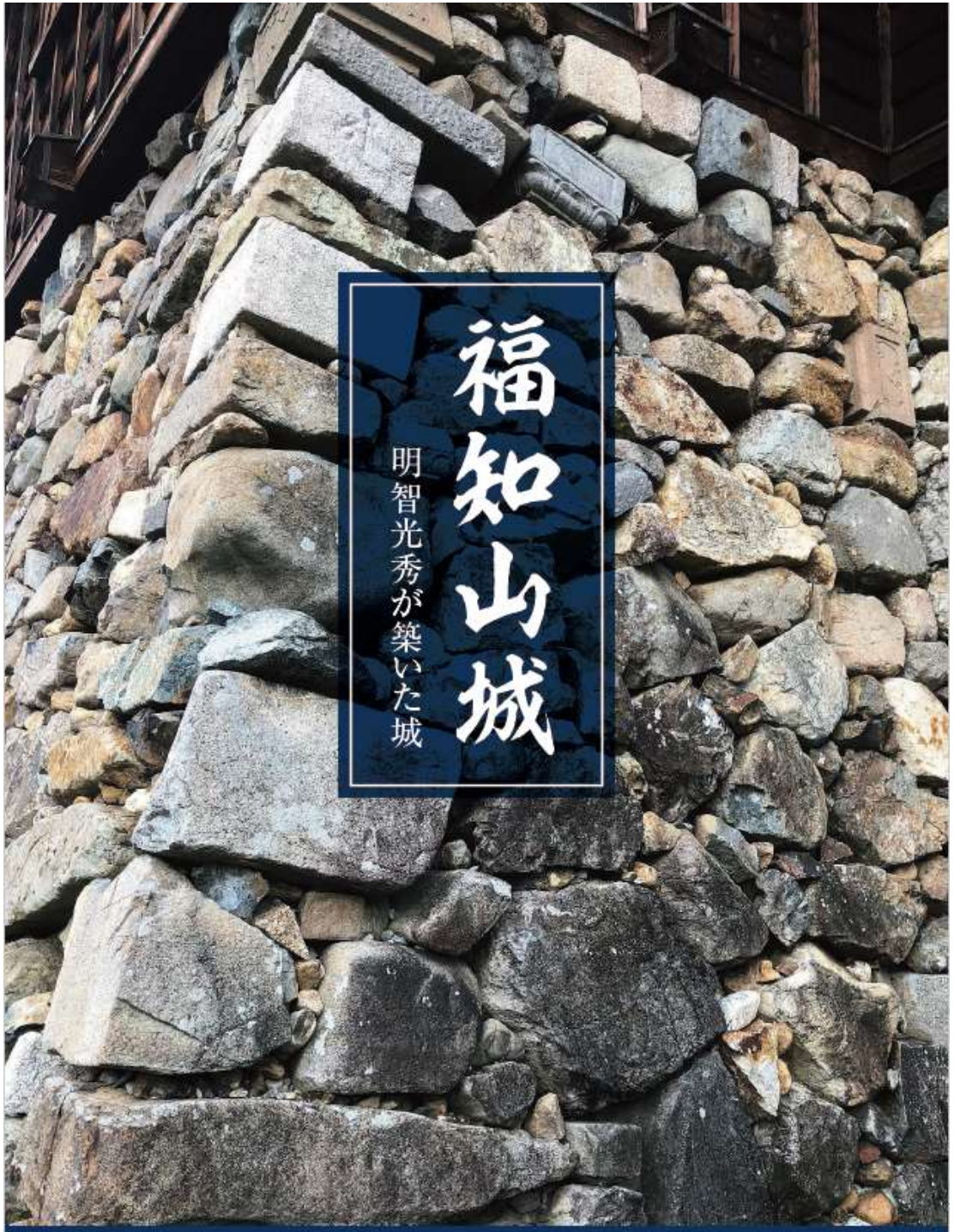

2020年大河ドラマ「麒麟がくる」 主人公：明智光秀

■開館時間

午前9時00分～午後5時00分
（入館は午後4時30分まで）

■休館日

毎週火曜日
祝日と重なる場合は開館し、翌日を休館日とします

年末年始
12月28日～12月31日まで、及び1月4日から6日まで

■入館料

一般券	個　人	団体(30人以上)
おとな	320円	290円
こども	100円	90円

共通券	個　人	団体(30人以上)
おとな	470円	450円
こども	190円	180円

※共通券は福知山市佐藤太清記念美術館の入館料とセット（割引）になっています。
※障害者手帳をお持ちの方及びその介助の方1名は入館料が半額になります。
※上記金額は消費税率が8％時点の入館料（税込）となります。
　消費税が10％になりますと、一部料金が変更になる場合があります。あらかじめご了承ください。

福知山城天守閣
〒620-0035 福知山市字内記5番地　TEL・FAX 0773-23-9564

福知山城の歴史

福知山城は明智光秀が天正７年(1579)ごろにこの地に城を築いたことから始まります。光秀は築城後、娘婿の明智秀満を城代として入れ、この地の統治を任せました。「本能寺の変」後の「山崎合戦」やその後の一連の顛末のなかで、光秀や秀満は滅ぼされますが、福知山城は羽柴秀長をはじめとした城主を迎え、改修と増築が進められました。伝来している絵図等の状況から江戸時代の有馬豊氏が城主の時期にはほぼ完成していたと考えられます。

由良川に対し伸びる丘陵を中心に築城された平山城で、城郭及び城下町周辺の河川を巧みに活用した堀で囲み、それらを一体的に構築した「総構」の城として完成しました。

江戸時代以降、転封や改易により城主が頻繁に変わりましたが、寛文９年(1669)に朽木稙昌が常陸国土浦から入部して以降は、明治維新に至るまで朽木氏が13代にわたり藩主を務めました。

明治６年(1873)の廃城令により天守周辺の石垣や銅門を残し、福知山城はその大半が失われました。しかし、昭和に入り市のシンボルとしての城再建の機運が高まり、市民による「瓦一枚運動」等もあり、有馬豊氏から松平忠房の頃の絵図資料を参考にした３層４階の望楼型の大天守と２層の小天守が、昭和61年(1986)に再建整備され、現在に至っています。

歴代福知山城主

安土桃山時代の福知山城主

明智光秀の滅亡以後、福知山城は一時的に羽柴秀長が管理し、その後杉原家次、小野木重次らの城主を迎えます。杉原家次は豊臣秀吉の正室ねね（おね）の伯父で「賤ケ岳の戦い」の際には坂本城の守備を受け持った武将です。天正15年頃、小野木重次が福知山城主となります。慶長5年（1600）の「関ヶ原の戦い」では西軍として参陣し、細川幽斎が立てこもる田辺城を攻め、西軍が敗北すると重次は一時福知山城に立てこもりますが、やがて開城し亀山で自決しました。小野木重次没落後はしばらく細川忠興の預かりとなります。

江戸時代の福知山城主（朽木氏入部以前）

「関ヶ原の戦い」の後、慶長５年に福知山城には有馬豊氏が入ります。豊氏は在封中、「有馬検地」といわれる検地を実施しました。豊氏転封後は丹波亀山から岡部長盛が入ります。５年の治世の後、稲葉紀通が摂津国中島から転封。「稲葉騒動」を起こし、改易となったのちには松平忠房が入城します。

福知山城主 朽木氏

松平忠房は在城 20 年の後、「島原の乱」後の混乱が残る肥前国島原に転封し、常陸国土浦から朽木稙昌が福知山に入って以降は 13 代約 200 年にわたり、朽木氏が福知山藩主を務めます。

朽木氏は歴代藩主の多くが奏者番（そうじゃばん）などの幕府の要職を歴任。また、書画文芸に秀で「星橋」を号した福知山藩主６代綱貞、オランダ商館長チチングとの交流など蘭学研究に通じた８代昌綱、書画を嗜み、また惇明館の建設などを行った 10 代綱方など学芸の分野に優れた藩主を多く輩出しました。

■福知山城主一覧

	歴代城主名		在封期間
1	明智（あけち）	光秀（みつひで）	天正7年～天正10年（1579）（1582）
2	羽柴（はしば）	秀長（ひでなが）	天正10年頃（1582）
3	杉原（すぎはら）	家次（いえつぐ）	天正11年頃～天正12年（1583）（1584）
4	小野木（おのぎ）	重次（しげつぐ）	天正15年頃～慶長5年（1587）（1600）
5	有馬（ありま）	豊氏（とようじ）	慶長5年～元和6年（1600）（1620）
6	岡部（おかべ）	長盛（ながもり）	元和7年～寛永元年（1621）（1624）
7	稲葉（いなば）	紀通（のりみち）	寛永元年～慶安元年（1624）（1648）
8	松平（まつだいら）	忠房（ただふさ）	慶安2年～寛文9年（1649）（1669）
9	朽木（くつき）	稙昌（たねまさ）	寛文9年～宝永5年（1669）（1708）
10	朽木（くつき）	稙元（たねもと）	宝永5年～享保6年（1708）（1721）
11	朽木（くつき）	稙綱（たねつな）	享保6年～享保11年（1721）（1726）
12	朽木（くつき）	稙治（たねはる）	享保11年～享保13年（1726）（1728）
13	朽木（くつき）	玄綱（とうつな）	享保13年～明和7年（1728）（1770）
14	朽木（くつき）	綱貞（つなさだ）	明和7年～安永9年（1770）（1780）
15	朽木（くつき）	鋪綱（のぶつな）	安永9年～天明7年（1780）（1787）
16	朽木（くつき）	昌綱（まさつな）	天明7年～寛政12年（1787）（1800）
17	朽木（くつき）	倫綱（ともつな）	寛政12年～享和2年（1800）（1802）
18	朽木（くつき）	綱方（つなかた）	享和2年～文政3年（1802）（1820）
19	朽木（くつき）	綱條（つなえだ）	文政3年～天保7年（1820）（1836）
20	朽木（くつき）	綱張（つなはる）	天保7年～慶応3年（1836）（1867）
21	朽木（くつき）	為綱（もりつな）	慶応3年～明治4年（1867）（1871）

福知山城のみどころ

福知山城天守閣

豊磐の井

天守閣の東側にある井戸は、直径 2.5m、深さは 50m を数えるなど城郭内部の井戸としては日本有数の深さを誇ります。地下の水脈まで岩盤を掘り下げており、今も清らかな水をたたえています。

銅門番所

二ノ丸の登城口にあった銅門番所は、大正年間に天守台に移築され、天守閣の再建に伴い再び本丸跡に移転されました。城の歴史を語る貴重な建物です。

石垣

天守台から本丸にかけての石垣は野面積という積み方で、400 年以上の歳月を耐えてきたものです。また多くの五輪塔や宝篋印塔などの石造物が転用石として使われているのも特徴です。

■天守閣内部

福知山城・明智、朽木氏関連資料を展示

明智光秀木像（日下寛治 作）

槍（銘丹州住道明）

初代城主 明智光秀

明智光秀画像
（大阪府岸和田市 本徳寺所蔵）

明智光秀は非常に謎の多い人物です。生年は享禄元年(1528)とも永正13年(1516)ともいわれますが、詳細は不明です。生誕地についても美濃国可児郡とも恵那郡ともいわれますが、判然としません。光秀が歴史の表舞台に登場するのは、永禄12年(1569)頃、光秀が織田信長に仕え始めて以降になります。

織田信長の家臣として、光秀は京都の統治や比叡山延暦寺攻めなどで功績をあげ、織田家有数の重臣となります。天正3年(1575)織田信長から丹波攻略を命じられた光秀は、丹波国人衆の大半を味方につけて、宇津城に拠る宇津氏や氷上郡に本拠を構える赤井・荻野氏などを攻めます。ところが天正4年(1576)1月になって突如波多野秀治が離反し敗走します。その後は口丹波から反勢力の城郭を攻略しながら奥丹波へ迫り、八上城に籠城する波多野氏を半年以上に及ぶ攻囲戦の末、天正7年(1579)6月になって陥落させました。その後、鬼ケ城や黒井城などを相次いで落城させ、ついに丹波を平定しました。そして信長から「その名誉は天下に比類なし」と高い評価と称賛を得て、丹波国の支配を任されました。

丹波支配にあたり、福知山の地に城を築き、城代として娘婿である明智秀満を入れました。また光秀は短い統治期間の中で、築城とあわせて地子銭の免除や治水事業を行うなど善政を敷きました。光秀はほどなく、「本能寺の変」を引き起こし、「山崎合戦」の後、悲劇的な最期を迎えますが、福知山の民衆は光秀の事績を忘れることなく信奉し、「名君」として現在でも親しまれています。

■福知山に残る明智光秀ゆかりの資料

家中軍法（かちゅうぐんぽう）　御霊神社文書

明智光秀が家中の武者・足軽らの戦闘方法や知行高別の賦課基準について定めた軍法です。現存する織田軍団唯一の軍法であり、「本能寺の変」のちょうど一年前の天正9年(1581)6月2日に定められ御霊神社に伝来しています。

所蔵：御霊神社

光秀ゆかりの地 福知山

明智光秀の重臣 明智秀満

明智秀満 画像:勇士左馬之助光晴（太平記英雄傳三十一）

もとは三宅弥平次を名乗っていましたが、荒木村次の室となっていた明智光秀の娘を再嫁され、明智姓を名乗ります。「本能寺の変」の計画を事前に打ち明けられた四人の重臣の一人。「左馬之介の湖水渡り」などの伝説でも知られる勇猛な武将です。信長の命により、光秀が丹波を平定すると福知山城の城代を任せられました。

明智秀満書状

光秀から福知山城の城代を任された明智秀満が発給した書状です。宛所は不明ですが、贈答品に対するお礼や由良川での鮭漁に対しての指示などが記されています。内容や秀満が福知山城代であった時期を考えると天正8年～9年ごろの書状と推定されます。